

幽靈（イプセン）

十九世紀末葉、西ノルウェーの田舎のアルヴィング夫人の別邸。彼女の亡夫は名望家として知られてゐたが、實は酒浸りの放蕩者で、小間使を手籠めにして孕ませる様な男であつた。さういふ夫との生活は地獄だつたが、夫人は妻たる義務を果すべく全力を盡す。不義の子レジーナは出入りの大工の娘といふ事にして引取つて育て、實父については知らさぬ儘、今は小間使として働かせてゐる。一人息子のオスワルトについては、穢れた家庭から遠ざけたいとて七歳の時から外國にやり、父親は高潔な人間だと教へ込み、夫の生前には一度も歸國させなかつた。その息子が畫家となつて戻つて來た。夫人が夫の全遺産を寄贈して孤兒院を建て、開院當日に夫の記念像の除幕式を行ふので、參列すべく歸國したのだ。

夫人は夫の名望を守ると共に、息子に父の遺産を一切繼がせず不幸な過去と訣別させて、新生活を始めようとした譯である。息子の歸宅を喜んだ彼女が、昔馴染みの牧師に、「魂もから

だもそこなはないである藝術家」を見てくれと云つて嬉しげに語つてゐると、最前オスワルトが入つて行つた食堂で椅子の倒れる音がして、レジーネの低く鋭い聲が聞えて來た。「オスワルト！ どうなすつたの！ 放して！」夫人は愕然として叫ぶ。ああ、昔の二人の「幽霊」がまた！

家族の爲に嘘までついて「永い恐ろしいお芝居」に耐へたのに、こんなおぞましい結果になるとは。夫人は思ふ。ああ、何と卑怯な自分だつたか。自分がこんなにも臆病なのは、「幽霊」の様な「古い思想や迷信」に囚はれて、現代の新しい書物が教へる「自由」や「眞理」の爲に生きる勇氣が缺けてゐるからだ。

そんな夫人にオスワルトは、自分がパリで忌はしい病氣に罹り、醫者には「父親の罪が子供に報いた」のだと云はれたが、立派な父に罪がある筈はなく、己が歡樂の生活ゆゑの自業自得としか思へない、今の望みは、レジーナを妻にして最期の時に致死量のモルヒネを飲ませて貰つて死にたい、それだけだと訴へる。終に夫人はオスワルトとレジーナに眞實を告げる。レジーナは驚くが、自分を「お嬢さんらしく」育ててくれなかつたとて夫人を恨み、田舎で病人の看護など嫌です、今後は船乗り相手の女に墮落する事になつても、自分の「人生の喜び」を

求めたいと云つて出て行つて了ふ。オスワルトは、良心の呵責や悔恨は消えたが、恐怖だけは
どうにもならない、お母さんがモルヒネを僕に飲ませて下さい、と云つてゐる裡に梅毒性脳病
の末期症状に陥る。夫人は呆然として息子を見詰める。

かうして夫も息子も守らうとした夫人の善意は悉く裏目に出た譯である。夫の名望を守る爲
に建てた孤兒院が開院前日に失火して全焼して了ふのは象徴的だし、折角穢れた家庭から遠ざ
けてやつたのにオスワルトは父親と同じふしだらな行爲に及ぶ。それは詰り、體面や義務感や
母親の愛情といふ「古い思想」によつて救はうとしても、どうしても救へない宿命的現實が儼
然として存在するといふ事だが、然らば舊思想を束縛や欺瞞として斥ける新思想に基く彼女の
行動は幸ひを齎したか。レジーナは眞實を知つて恨みや憎しみのみを募らせ向上の意欲を失つ
て了ふし、オスワルトは道徳的には樂になつたものの、父への尊敬を失つてからは己れの事し
か考へられなくなり、親への子供の愛情だつて「古臭い迷信」、詰りは「幽霊」だと云つて母
親を傷つける。

だが、人たる者としての宿命に縛られながら、時代の子として時世に翻弄され足掻きつつ生
きるの吾々として同じであつて、夫人の悲劇は決して他人事ではない。

(青山杉作譯、「イブセン名作集」、白水社)